

I 岐阜市の概況

1 市勢の発展

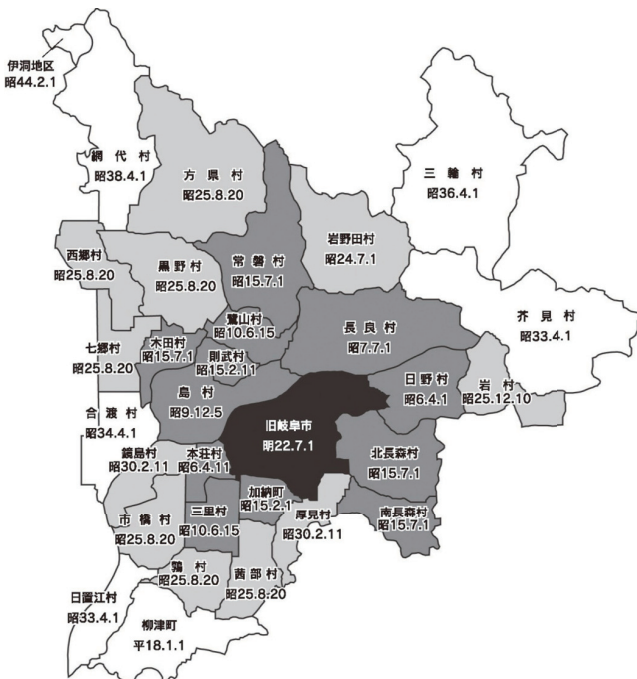
この地は、木曾、長良、揖斐の3大河川の沖積土によってできた肥沃な濃尾平野の北部に位置し、北部から東部にかけての台地上で先土器時代の遺物が発見されています。縄文・弥生・古墳時代の遺跡は南部の低湿地を除き、市内全域に広がっています。

平安時代には東大寺領の広大な荘園が南部一帯にありました。室町時代に入り土岐頼遠がこの地を治め、つづく土岐頼康の時代には美濃、尾張、伊勢3国の守護職を兼ねて革手城を築きました。その勢力は細川、斯波、畠山の三管領を凌駕したともいわれています。守護土岐氏は、戦国時代に入って斎藤道三によって追放されました。道三は稲葉山城を改築して美濃一国の大守として君臨し、斎藤氏は三代にわたり美濃を支配しましたが、後に織田信長によって稲葉山城を攻め落とされました。信長はこの地を拠点にして天下に覇をととなえ、「岐阜」の名を全国に広めました。

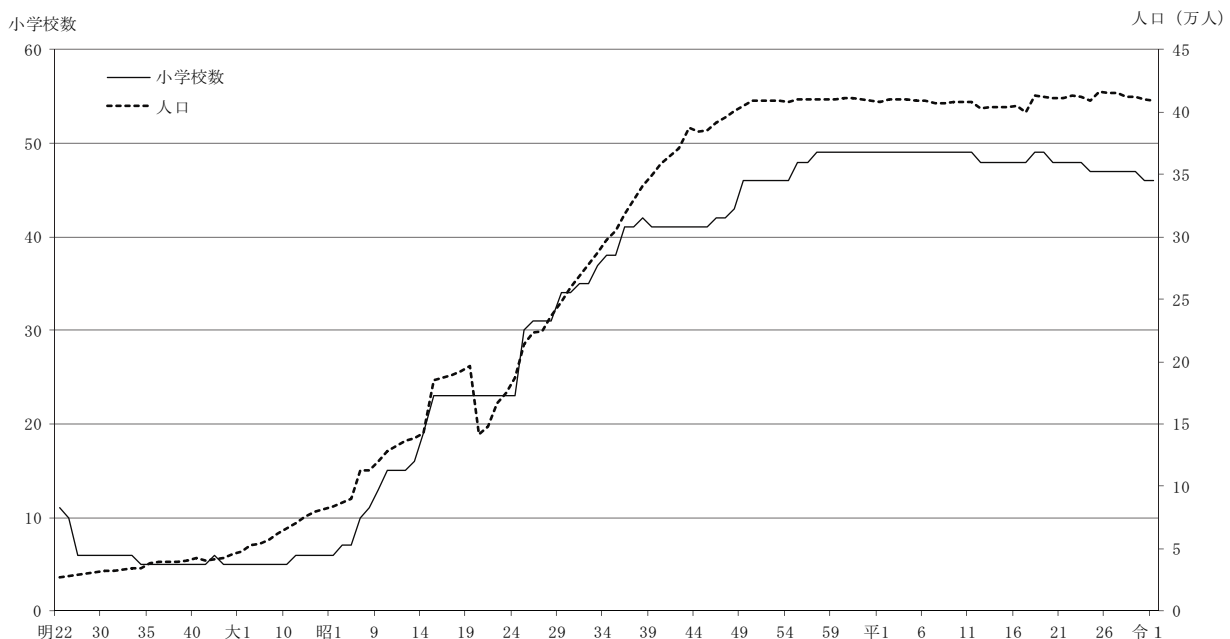
慶長5年(1600)関ヶ原合戦の際、岐阜城は落城し、以後廃城となりました。岐阜町は尾張徳川氏の領地となり、以後商工の町として250年間、諸役が免ぜられ、順調な発展を遂げ、また加納藩の中心であった加納町は中山道の宿場町としても栄えました。

明治4年(1871)廃藩置県により岐阜県が成立し、同6年今泉村(現岐阜市)が県庁所在地と定められてからは、伝統の商業都市にあわせて、県政の中心となりました。以後近隣町村を合併し、平成8年4月1日には中核市として全国有数の都市となり、産業都市としてあるいは観光都市として中部地方における政治、経済、学術、文化等の主要都市となりました。

さらに平成18年1月1日、柳津町との合併により、面積202.89km²、人口42万人を擁する新たな「岐阜市」が誕生しました。



▼小学校と人口の推移



2 地勢

本市は、直線で東京から270km、大阪から140km、名古屋からは約30kmの距離にあり、わが国のほぼ中央部の岐阜県南部に位置しています。

地勢的には木曾・長良・揖斐川によって作られた濃尾平野（沖積平野）の北端、長良川の緩扇状地帯上にあり、海拔高度は平地部の北部で約60m、南部で5m、そして中央部においては約10mで、長良川畔には金華山（329m）がそびえています。

なお、海拔高度60m以下の平地は、市域の約60%を占めています。（市域202.89km²）

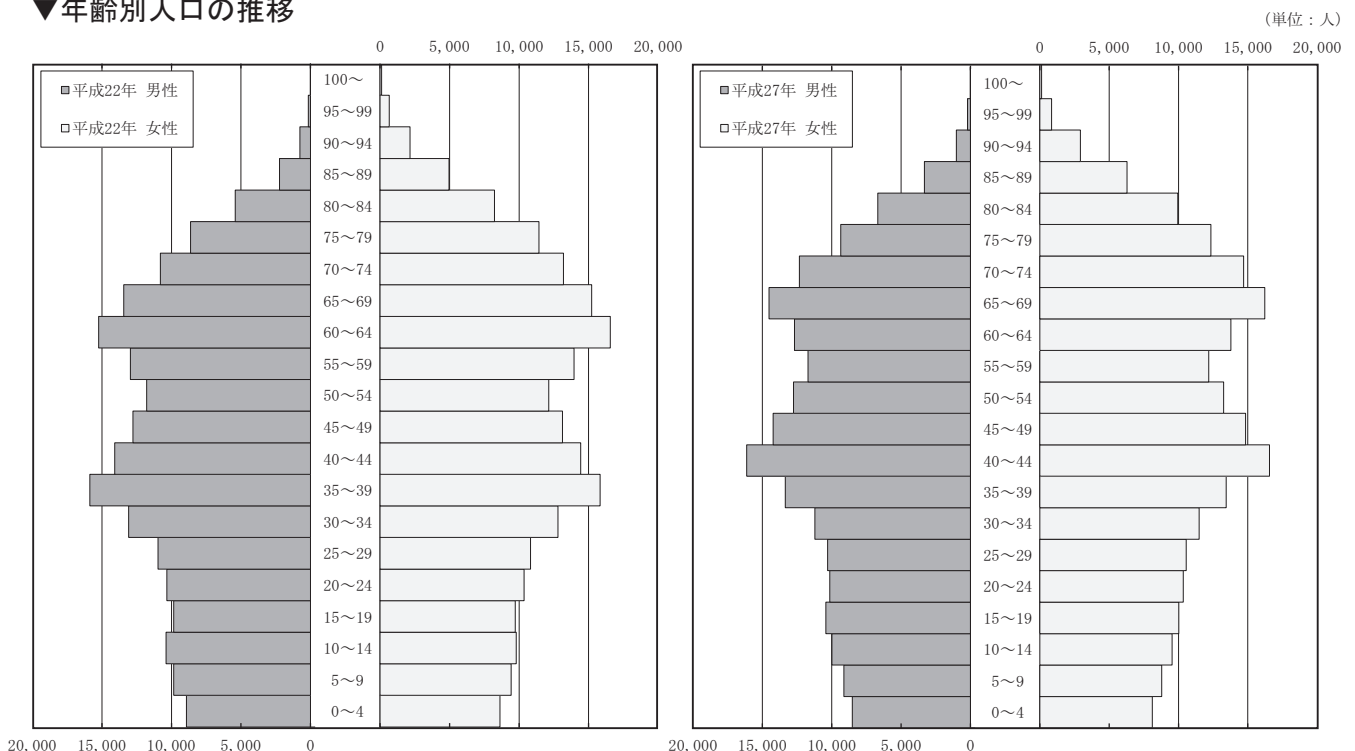
3 気候

市の気候は、東海型の気候を示し、冬季は北西ないし西寄りの風が強く、降水量は少なく温暖、夏季は南寄りの風が強く、著しく高温多湿です。

4 人口の推移

大正 9年（第1回国調）	62,713人	昭和45年（第11回国調）	385,727人
大正14年（第2回国調）	81,902人	昭和50年（第12回国調）	408,707人
昭和 5年（第3回国調）	90,112人	昭和55年（第13回国調）	410,357人
昭和10年（第4回国調）	128,721人	昭和60年（第14回国調）	411,743人
昭和15年（第5回国調）	172,340人	平成 2年（第15回国調）	410,324人
昭和20年（終戦の年）	141,518人	平成 7年（第16回国調）	407,134人
昭和22年（第6回国調）	166,995人	平成12年（第17回国調）	402,751人
昭和25年（第7回国調）	211,845人	平成17年（第18回国調）	399,931人
昭和30年（第8回国調）	259,047人	平成22年（第19回国調）	413,136人
昭和35年（第9回国調）	304,492人	平成27年（第20回国調）	406,866人
昭和40年（第10回国調）	358,190人		

▼年齢別人口の推移



※岐阜市年齢別人口統計表より抜粋